

「ライフサイエンス分野の統合データベース整備事業」 第1回研究運営委員会・統合 DB 整備戦略作業部会(合同会議) 議事要旨

【日 時】 平成18年11月8日(水) 13:30～15:30

【場 所】 情報・システム研究機構 事務局会議室(秀和神谷町ビル2階)

【出席者】 堀田機構長、大倉委員、金久委員、久原委員、高木委員、田畑委員、中村委員、増保委員、松原委員、吉田委員、大久保委員、小原委員、五條堀委員、黒田委員、菅原委員、高野委員、藤山委員

【陪 席】

文部科学省 : 坂下課長補佐、松永調査員、石塚調査員

厚生労働省 : 荒木専門官

農林水産省 : 佐藤課長補佐

経済産業省 : 牧係長

内閣府 : 柴田主監補佐

(独)科学技術振興機構 : 酒井主任調査員

【事務局】 高野事務局長、河野総務課長、能住財務課長、笹島総務課課長補佐、加藤財務課課長補佐、丸山遺伝研管理部長

【挨拶】

堀田情報・システム研究機構長から、座長を事業の代表者である機構長が行うこととしたいとの提案があり、了承された。座長からの委員会メンバー紹介の後、文部科学省坂下課長補佐から、文部科学省の本事業に対する考え方、経緯などの説明があった。

【議 事】

(1) 統合データベース整備事業について

堀田座長から、本提案にいたる経緯の説明があった。「資料1 ライフサイエンス分野の統合データベース整備事業 提案書」により18年度のスキームの説明があり、また、19年度の概算要求の状況、今後5年間の予定の説明があった。さらに、データベース統合中核機関の整備方針についての説明があった。

(2) データベース整備戦略の方針について

堀田座長から、本事業を行っていくに当たり共有したい共通認識として、「資料2 データベース整備戦略の方針(案)」の説明があった。これについての質疑応答については以下の通り。

● 項目(6)の文案に対して、以下のような修正意見があった。

修正前:「分子レベルのデータは欧米でのデータベース化・統合化が進んでいる。」

修正後:「分子レベルのデータは欧米、日本でのデータベース化・統合化が進んでいる。」

上記の意見に基づいて修正を加えることで、データベース整備戦略の方針について了承された。

(3) データベース整備戦略の全体計画について

大久保委員から、「資料3-1 データベース整備戦略ロードマップ(案)」を用いて、今後5年間の整備戦略ロードマップ(案)の説明があった。引き続き、高木委員から、「資料3-2 データベース整備戦略の事業化計画(案)」を用いて、今後5年間の事業化計画(案)の説明があった。これらの説明についての質疑応答は、次項の「(4)今年度の予定・成果物について」の質疑応答と合わせて、まとめた形で記載する。

(4) 今年度の予定・成果物について

大久保委員から、「資料4 平成18年度の成果予定(案)」を用いて、今年度の実施項目と各々の成果物(案)について説明があった。

以下、(3)項と(4)項に関する質疑応答をまとめて記載する。主として以下の4点に関して質疑応答があり、議論が行われた。また、委員会資料間で用語、分類の統一をお願いしたいという意見があり、次回から留意することとした。

- ①ヒトとヒト以外の DB 統合化の方針について
- ②今年度の予定・成果物について
- ③医学、薬学、医療分野への取り組みについて
- ④ユーザーニーズと統合データベース運営体制の柔軟性について

①ヒトとヒト以外の DB 統合化の方針について

- 「ヒトの統合化」と「ヒト以外の統合化」を分けるべきではなく、全体として統合化するという基本姿勢が必要であり、その中で個別の重点化(例えばヒトへの重点化)を行っていくべきである(センターのチーム構成やデータベースの構成、インターフェースもこのことを反映すべきである)。
- ⇒ 計画の精神は切捨てではなく、全体の統合化をまず考えそれから重点化を目指す姿勢と本質では同じであり、重点化の一案として出している。
- ⇒ ヒトの DB 統合化を当初重点的に行うことの意味として以下のことがある。
 - 1) ヒトでは DB コンテンツとその種類が他種生物よりも圧倒的に豊富であるため、モデル生物等も重視しつつ、ヒトを中心として整理すれば全体をまとめやすい。
 - 2) 国内では現在ヒト以外のプロジェクトが多く、ヒト関連のプロジェクトはむしろ少数派であることから、ヒト、医療等への将来の発展を視野に入れつつ、ヒトに重点化することに意義がある。

②今年度の予定・成果物について

- 18年度成果のシステムをインストールするサーバーは具体的にどこに設置するのか。
- ⇒ JST 内に設置する。アドレスは独自のものを別途採用し、将来移動も可能な状態をとる予定。

③医学、薬学、医療分野への取り組みについて

- 創薬、薬学の観点からみると化合物の DB が重要であるが、化合物 DB の世界は生物学 DB の世界と異なり、無料の情報は少なく、ベンチャーが有料で情報提供している場合が多い。本統合データベースプロジェクトでは人の配置も含めて、化合物 DB に対してどのように取り組まれるのか。
- ⇒ 化合物 DB の世界は生物学 DB の世界と異なる発展をしてきており、情報が有料化されており、アカデミックにはこの分野の研究者が少ない。協力の求め先が不足しており、その点も含めて更に検討したい。
- ⇒ 医学、薬学、医療分野への取り組みに関しては、未だ十分に議論がなされておらず、今年度はまだ調査の段階である。調査結果を踏まえて来年度以降具体的に取り組みを始め、省庁の枠を超えたDBとしていきたい。

④ユーザーニーズと統合データベース運営体制の柔軟性について

- 成果の絵として、ユーザーの観点から書いたものが必要。
- ユーザーからの視点を随時導入し、それを反映できる柔軟で開かれた仕組みが組織体制に必要。
- ユーザーからの視点は世界的な観点で考慮すべき。
- ユーザー教育も必要。
- DB の作り手とエンドユーザーの中間の位置にいるユーザーの声も聞く必要がある。

以上の議論を踏まえた上で、データベース整備戦略ロードマップ、データベース整備戦略の事業化計画、及び平成18年度の成果予定については、次回の委員会において再度議論を行うこととなった。

(5)その他

堀田座長から、本事業を進めるにあたり、アノテーションの実施が重要になると考えられるので、教育プログラムについて有識者の意見を求める会合開催を行いたいという提案があった。さらに、高木委員から、「資料5 教育プログラムの会合開催(案)」を用いて、教育プログラムの会合開催(案)の説明があり、了承された。

堀田座長から、今後、運営委員会を12月中旬と3月上旬の2回開催することを予定しており、日程の調整を後日事務局から行いたい旨の発言があり、了承された。

坂下文部科学省課長補佐から、次の2点について指摘があり、了承された。

- 1) 本年度の成果として得られるデータベース整備戦略は、来年度以降いかなる機関が受託したとしても適用されるものであること
- 2) 国家事業としてやっていく以上、成果を一般の方に説明できる内容とすることが必要であること

以上